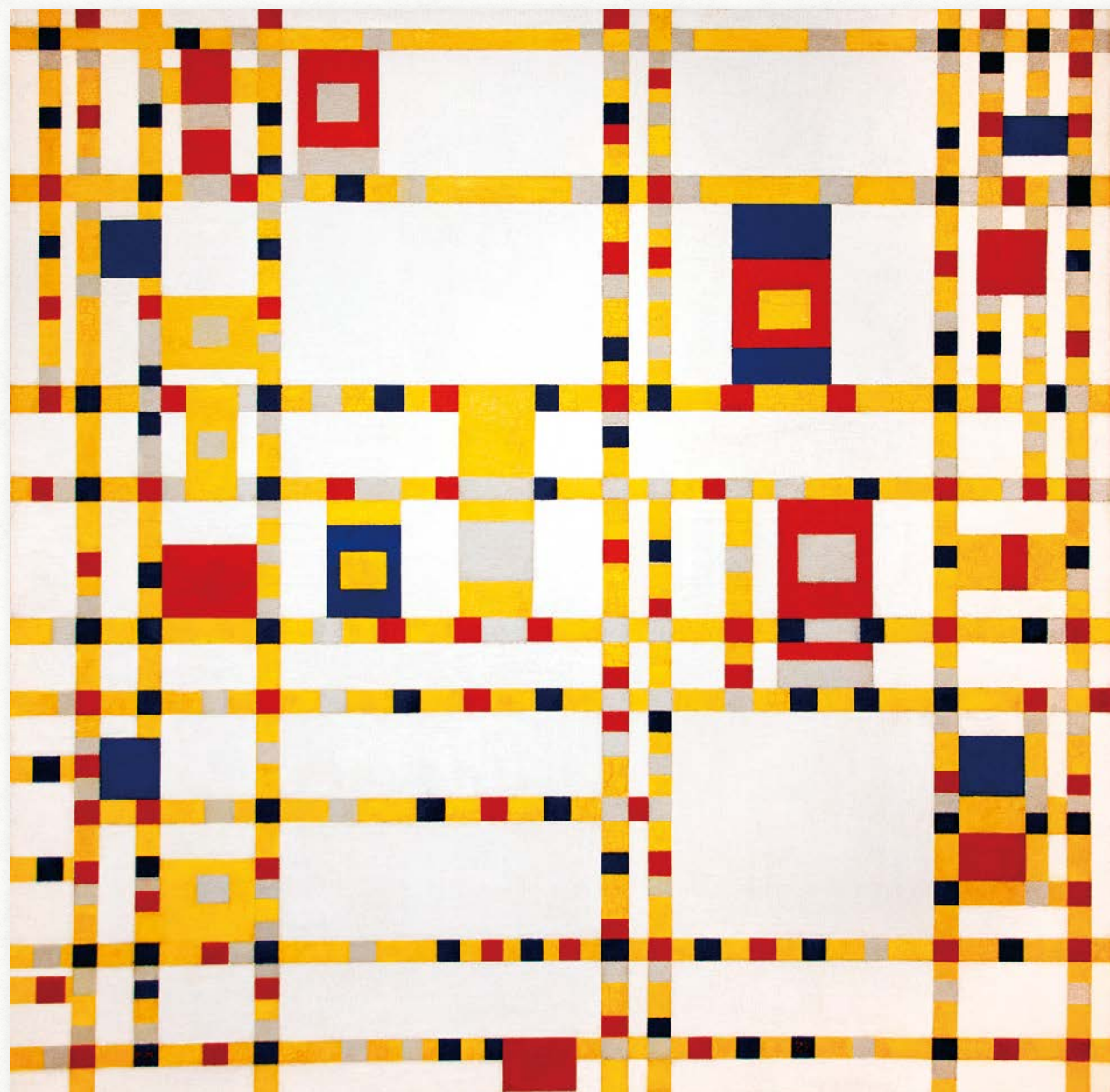




第 13 回

「ブロードウェイ・ブギウギ」

ピエト・モンドリアン

キャンヴァス、油彩 127×127cm

1942～43年 ニューヨーク近代美術館蔵

※『美術2・3』P33に掲載

モンドリアン「ブロードウェイ・ブギウギ」を読む

絵画には、人物画、風景画、静物画などがある。20世紀になって、そこにもう一つ、抽象画が新たに加わった。人物、風景などは描く対象が目に見える具象の世界のものだが、抽象画は、そのような「対象」のない美術の新しい展開だった。

カンディンスキーのような「熱い」心の動きを反映した抽象画や、このモンドリアンのような「冷たい」理知的な造形感覚の抽象画など、現代アートは様々な試みをしてきた。もちろんイスラム美術など、抽象的な造形の美術はそれまでもあったが、モンドリアンの属する西洋美術の世界において、抽象画というのは、やはり20世紀の現代アートの新しい潮流だった。

しかしモンドリアンの絵画は、単なる「無対象の世界」ではない。モ

ンドリアンが抽象画へと至った道を見ると、具象の光景の中にある要素を単純化し、そこから水平線と垂直線を抽出し、自身の芸術世界を作り上げていくという探究の時期があった。形だけでなく、色彩も単純化・抽象化され、赤・青・黄の三原色(それと無彩色の灰色)だけで描かれるようになる。

ところが晩年、垂直と水平の線と三原色だけで構成された「抽象画」に、再び具象的な風景を連想させるものへの変化が見られた。それが「ブロードウェイ・ブギウギ」だ。この絵は、マンハッタンの道路が南北に交差する光景や、地下鉄の路面図を連想させるイメージでもある。もちろん、あのモンドリアン・スタイルの形と色、という約束は崩してもいない。その絵には、タイトルに

もある音楽のリズムや、街の輝き、トキメキ、しかし抽象的な造形美、そういった「全て」が盛り込まれている。

かつて抽象画が登場した頃、絵画は具象であるべきか、それとも抽象画か、と二者択一のような風潮の時代があった。しかし21世紀に入ると、世界のアートシーンのトップランナーである、ゲルハルト・リヒターやダミアン・ハーストなど、具象画も抽象画もどちらも描く、というアーティストが増えてきた。今や抽象画は、人物画や風景画、静物画と対峙するものでなく、それらと並列する絵画の一つとなった。

テーブルの上のリンゴを描いた後に、次は抽象画を描いてみるのも良い。それはどちらも「絵画」という一貫した世界なのだから。

布施英利
ふせ・ひでと

1960年群馬県生まれ。美術批評家。東京藝術大学大学院修了後、東京大学医学部助手などを経て、現在に至る。著書に『脳の中の美術館』(筑摩書房)、『わかりたい現代アート』(光文社)など多数。光村図書中学校『国語』教科書(2年)に、書きおろしの説明的文章「君は『最後の晩餐』を知っているか」を執筆。